

～今月の読み物～

「落語と私」 その参

三代目 橘ノ百圓

今回は、扇馬師匠の真打昇進の話からですが、その前に商学部の私が何故、文理学部の落研に入会したかと言う裏話から始めたいと思います。もう52年前になりますが、私の大学受験の選択科目が日本史だったのです。その勉強中に、日本文化が大きく花開いたのは鎌倉時代で、これは藤原氏を中心とした貴族社会から、武士の時代へと移行により、一部上流階級から、武士と一般庶民も参加する文化へと変った中に、猿楽、田楽舞等が現れ、又、宗教も多岐にわたり、その中から茶道、華道が出現し今日まで続いている訳で、最も試験問題に出る時代背景に興味を持ったのです。そこで、大学に無事入学出来たら、茶道部に入ろうと秘かに心に決めていました。入学出来、通学初日、文化系の生徒は1年間教養課程で、京王線の下高井戸に有る、文理学部の校舎に通うのですが、その説明会の日に、多くの新入部員募集の研究会の中を、茶道部を捜して歩いていますと、フト！落語研究会の5文字が、目に飛び込んで来たのです。「アッ！落語も伝統在る日本文化の一ツだナ」と極く単純な思いから、何かに魅せられる様に入部届けに名前を書いたのですが、これが私の人生を大きく狂わせる事になるとは、まだ当人は気が付いていなかったのです。数日後、その落研から集合場所、日時の案内が送られて来ましたが、不思議な事に、落研の部室ではなく、何号棟の裏に集合と在りましたので、チョイト狐に摘まれた様な思いでした。当日その指定場所に行ってみますと、落語好きな顔をした1年生と思われる数人と、先輩と思しき4人。「何、何なんだこれわ！？」との思いを察したかの様に、その中で1番偉そうな人が「今日はこんな所に集めて疑問に思うかも知れないが、この落語研究会は、去年出来たばかりの文理学部の落研なので、それを承知してもらいたい。また出来たてのホヤホヤなので、多くの部員を必要としている。他学部の生徒も是非、この文理の落研に残ってもらいたい。」エッ！それって詐欺じゃないの！？入部届けの時に何故それを言ってくれなかったの、とは思いましたが、先輩方の自己紹介を聞いている内に、4年生が2人、これは落研設立者、3年生1人、2年生1人、この2人は数合わせで、落語の事は知らない方達、テェ事は今ここに居る1年生9名が、来年実権を握る事が出来るのだ！との如何にも商人らしい計算が働いたのです。結果として、それが良かったのですが、その後の1年生の自己紹介で、文理学部は4人、他学部が5人の集りと分かりました。今考えれば、1番はじめに目にした落研が文理学部だった訳で、その先を歩けば各学部（経済学、商学、法学は、経商法の落研として一緒に活動しています。）の落研に出会えたのでしょうが。そしてこの他学部の受入れの許しを2人の4年生が、各学部を廻って頭を下げてくれたそうです。有難うございます。先輩方並びに同期の仲間達のお陰で、楽しい落語との関わりが出来たのです。又、その後、文理の落語は、年を追うごとに会員数も増え、現在本職の噺家の数は、林家正雀師匠（落語協会）、三遊亭笑遊師匠（落語芸術協会）を筆頭に、現前座を除いて15名ほどに成っております。これは、喜んで良い事なのですかネ！？これも偏に創立者で在る、2人の4年生のお陰様と感謝をしております。これが商学専攻の私が文理落研に入会した経緯です。さて前書きが長く

なりましたが、いよいよ扇馬師匠の真打昇進の慶事を書きたいと思います。当時の、三遊亭扇馬、本名 布施重雄は昭和10年8月山形県南陽市に生まれ、昭和29年9月、四代目三遊亭圓馬に入門、三遊亭富太馬、昭和33年3月、三遊亭扇馬で二ツ目、この3年半の※前座修業は大変で、その頃は噺家の数も少なく、また、都内の寄席は戦前185軒あったものが、戦後は、戦災で焼けて、復興出来なかったり、先を見て再建しなかったりで、その数はグンと減りましたが、それでも昭和30年頃は端席を入れますと20軒近くあった為(因に映画館の数は557軒です)楽屋に前座が1人何ンテ事も在った様で「それは、それは忙しかったヨ」との話を良く聞きました。前座時分は、食は、師匠から与えられますが、衣は、師匠、先輩方からのお下りを貰ったりで何ンとかなります。住が1番の苦しみだった様です。その頃の富太馬は、「昼のワイドショー」?でお馴染みの、桂小金治さんの所に居候をしていましたので、たまに噺の稽古を付けて貰ったと聞いております。二ツ目に成ってから、しばらく小金治兄さんの所に居ましたが、昭和39年の結婚を機に、私が通った日暮里のアパートに引越した訳です。「やはり、噺家生活は大変だった」とオカミさんは振り返って言いますが、その苦しい生活の中から、私がお稽古に行くと必ずご馳走してくれたのですから、頭が下ります。「オカミさん、有難うございます。」その苦しい噺家生活も楽になって来た昭和44年に真打昇進となった訳です。これが又、大変な出費で、先ず真打名を決めるのですが、詳しい経緯は分かりませんが、三代目橘ノ圓が最有力候補に挙げたのですが、これに対し当時の扇馬師匠は「そんな女みたいな名前は、嫌だ!」と圓馬大師匠を困らせたそうです。しかし、大師匠の言葉ですから、当然受け入れたのですが、この圓と言う名前は、初代が去年の11月に二代目が誕生しました(小円歌から)立花家橘之助の亭主で、名人と謳われました二代目三遊亭圓馬の実弟で、二代目が「とんち教室」でお馴染みの、桂三木助、そして三代目は、私の師匠が嗣いだ訳ですが・・・これからが大忙しで、この続きは次号と致します。

「落語豆知識」

※「前座修業」

この前座修業は、各協会、師匠方により異なりますが、大別すると内(家)弟子と、通い弟子の二ツです。私の師匠は、圓馬師匠のご自宅が狭い理由も在りまして、通いでしたので住は居候だったのですが、内弟子ですと大変な思いは在りますが、住居も保証されます。先ず前座見習いで、1ヶ月から1年、その後協会に登録されまして、初めて前座として認められるわけで、毎日の様に自分の師匠の家に顔を出してから、寄席に通います。楽屋仕事为中心で、各先輩、師匠方へお茶を出しますが、これが一人ひとり好みが変わりますから、それを手帳などに記して覚えるわけで、次に着換の手伝い、その間に高座布団をヒックリ返し、捲りをヒックリ返し、たまに、お茶をヒックリ返して小言を喰います。根多帳の記入一席終って下りて来た師匠の着換を手伝いながら、脱いだ着物を畳むのですが、これが幾通りか有りまして、別の畳み方をしますと又小言です。これも手帳に記します。またその間に太鼓を叩きますが、各々二ツ目、真打で出噺子が違いますから、これもシッカリ覚える訳で、マア1人で遣える分では無いとは言え、其はそれは大変な仕事です!何か有れば直ぐに小言ですから。前座の言える言葉は2つ「ハイとすいません」。寄席がハネて又師匠の家に顔を出して1日が終わります。この修業を、3年から5年経て

やっと二ツ目に昇進ですから、大概の噺家さんは、真打に成る時よりも、二ツ目に上がった時の方が嬉しかった、と言います。

